

# 日本文学を世界文学として読む

二〇一八年度「文学研究科プロジェクト」成果報告書

世界文学と「地方」	堀 まどか (1)
——野口米次郎とシカゴの詩雑誌『ポエトリ』	
片山廣子の新体詩「あかき貝」について	永井 泉 (18)
——クリステイーナ・ロセッティ『シング・ソング童謡集』との関わり	
『太平記』引用説話の典拠と文脈	大坪 亮介 (32)
——英訳『太平記』の注記を端緒として	
和歌と漢詩	
——平安朝における実例をめぐって	山本 真由子 (44)
芥川龍之介から堀辰雄へ	劉 娟 左 (31)
——『玉書』の受容から見る東西意識	
芥川龍之介「秋山図」など	奥野 久美子 左 (18)
——世界文学としての芥川作品	
『オデュッセイア』の類話における英雄像比較	高島 葉子 左 (1)
——オデュッセウス、百合若大臣、ポイヤウンペ	
あとがき	(i)



Urban-Culture Research Center

大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター

## Reading Japanese Literature as World Literature

World Literature and the Local: Yone Noguchi and *Poetry* - a Chicago Journal of Verse

HORI Madoka ..... 1

An Analysis of the poem "A Red Shell (Akaki-kai)" by Hiroko Karayama:

The Influence of *Sing-Song: A Nursery Rhyme Book* by Christina Rossetti

NAGAI Izumi ..... 18

Issues on the Sources and Contexts of the Stories quoted in *Taiheiki*:

Considering McCullough's Notes as a Clue

ŌTSUBO Ryōsuke ..... 32

*Waka* and Sinitic Poetry: Examples in the Heian Period

YAMAMOTO Mayuko ..... 44

From Ryūnosuke Akutagawa to Tatsuo Hori:

The Orient and the Occident in their Interpretation of *Le Livre de Jade*

LIU JUAN ..... left 31

"Autumn Mountains (*Shūzan-zu*)" by Ryūnosuke Akutagawa:

Akutagawa's Works as World Literature

OKUNO Kumiko ..... left 18

Odysseus, Yuriwaka-daijin, and Poyyaunpe:

A Comparative Study of the Heroic Tales in Ancient Greece, Japan, and Ainu

TAKASHIMA Yōko ..... left 1

**Urban-Culture Research Center,  
Graduate School of Literature and Human Sciences,  
Osaka City University**

# 『太平記』 引用説話の典拠と文脈

——英訳『太平記』の注記を端緒として——

大坪 亮介

『太平記』で語られる説話の中には、長文化して本筋との関わりも薄いものがあり、それらは単なる余談のように見える。英語圏唯一の『太平記』翻訳に見られる注記も、このような理解を反映していると思われる。本稿では、そうした見方に修正を迫る近年の研究状況を紹介し、典拠とも密接に関わりあう『太平記』の複雑な説話引用のあり方を指摘する。

## はじめに

『太平記』<sup>(1)</sup>は、後醍醐天皇の鎌倉幕府打倒計画に始まり、建武政権の成立と崩壊、室町幕府の草創と内訌を描いた軍記物語である。全四十巻から成り、叙述の範囲はおよそ六十年にも及ぶ。しかもその作品世界は、和・漢・天竺の様々な引用説話に彩られている。説話の多くは、作中で語られる出来事の先例(類例・反例ともに)として挙げられており<sup>(2)</sup>、なかには巻二十八の漢楚合戦説話や巻三十七の長恨歌説話のように、長文にわたり説話が語られる例も見受けられる。

こうした長文の説話は、ともすれば先例を示すという役割からは逸脱しているように捉えられることがある。こうした認識を端的に示す事例が、英語圏における『太平記』の唯一のまとまった翻訳(ただし、序から巻十二までの部分訳)であるヘレン・クレイグ・マツカラ氏(Helen Craig McCullough)の『太平記 中世日本の年代記』(以下、英訳『太平記』と呼ぶ)である<sup>(3)</sup>。後掲するように、この翻訳では序論において長文説話に関する評価が下されており、さらに本文では引用説話の前後に注記を設けて、その説話の役割や概要などが示されているのである。英語圏の読者に馴染みの薄い説話が多く語られる『太平記』を読み進めていく上で、こうした処

置が有効であったことは想像に難くない。

しかし一方で、近年の『太平記』研究は、単に先例を示すだけにとどまらない、複雑な説話引用のあり方を解明しつつある。本稿では、こうした研究成果の紹介に加え、新たな典拠の指摘によって、はじめて引用説話の文脈が明らかとなる事例についても報告する。

### 一 英訳『太平記』の引用説話

まずは、英訳『太平記』における引用説話について検討していこう。訳者であるヘレン・クレイグ・マツカラ氏はカリフォルニア大学バークレー校名誉教授で、日本文学の研究と英語圏への紹介に多大な功績を残した。英訳『太平記』にはマツカラ氏による序論があり、そこでは『太平記』の概要と武士を中心とした中世日本社会の歴史が述べられている。訳文は流布本を底本とする『新釈日本文学叢書』に基づいており、全四十巻ある『太平記』のうち、いわゆる第一部と呼ばれる巻十二までの部分訳である。とはいえ、訳文には脚注、巻末には主要語句の索引までが付されている。かかる充実した内容の翻訳が、日本古典文学大系『太平記』（一九六〇年〜一九六二年刊）に先立つ一九五九年にアメリカで公刊された

ことは注目に値しよう。実際に、この翻訳に接した市古貞次氏は以下のように賞賛している<sup>(4)</sup>。

このように日本においても現代語訳も出されていない「太平記」を、完訳しようとしたのがマツカロ氏（筆者注、マツカラ氏のこと）である。（中略）欧米における日本文学の研究は戦後、盛んであり、すぐれた研究書も現れているが、本書は、それらの中でも労作の一つに数えられよう。人名などのよみ方や細い<sup>(5)</sup>訳語についてはなお誤りが少なくないようであるが、このような地味な、原典に忠実な訳書が刊行されたことは、大いに慶ぶべきであろう。

しかし、このような翻訳があるにもかかわらず、英語圏の日本文学研究において、『太平記』は長い間関心の対象となることはなかったようである。英語圏では唯一といってよい『太平記』研究者であるジェレミー・セーザ氏は、西洋の『太平記』研究と英訳『太平記』について、次のように指摘している<sup>(5)</sup>。

『太平記』は、不幸なことに西洋の言語においていまだ重大な学術的関心の対象となっていない、前近代の最も重要な古典文学作品の一つとして名をはせている。（中略）日本国外で『太平記』を扱った論文は、一九五九年のマツカラ氏による画期的な序文

および巻十二までの翻訳しかない。しかし、それは部分的な翻訳に過ぎず、原文にある多くの仏教的挿話や中国の歴史的な話を省いている。

セーザ氏によれば、日本国外での『太平記』の専論はマツカラ氏のもののみという状態が続いており、しかも翻訳においては、しばしば原文の挿話が省略されているという。さらに英訳『太平記』を瞥見すると、これ以外にも、長文の引用説話には原文にない独自の処置が施されており、ここからは、英訳『太平記』における引用説話の位置付けが知られるのである。以下、Chapter12 “The Building of the Great Palace Enclosure; The Matter of the Shrine of Sugawara no Michizane（原文「大内裏造営の事附聖廟の御事」）を例に、この点について検討する。

この章段は、念願の鎌倉幕府打倒を成し遂げた後醍醐天皇がなごらく廃絶していた大内裏再建を企てたことを語る。この箇所翻訳で注目されるのは、傍線を付したように、引用説話の前後に「」を設けて、説話の概略とその意味が補足されている点である。

翌年（筆者注、鎌倉幕府滅亡後の建武元年へ一三三四）一月十二日に、貴族たちは天皇に以下の報告を行なった。

「陛下に関する事柄はきわめて多くなつてしまい、

百の官庁は限界にきております。四方の長さがたつた四百七十五ヤードに過ぎないため、この宮殿の範圍は狭く、儀式を準備することができません。しかし、もし百二十ヤードずつ各辺を長くしても、ホールや建物が建てられたとしても、古代の皇居と同様ではありません。大内裏が建設されるべきです。」  
彼らがそう言ったので、天皇は安芸国と周防国にその費用を分担するよう命じ、日本の全ての土地にいる地頭や御家人の年間税収の二十分の一を確保した。

「以下、本来の大内裏の説明があるが、それはさらに菅原道真（八四五〜九〇三）の長い伝記につながっていく。道真は追放された大臣で、その怒れる魂が大内裏の焼失を招いたと信じられていた」

さて、古い大内裏は、秦の始皇帝の都である咸陽宮をモデルにしていた。……

（筆者注、以下、大内裏の建物や調度を列挙し、次の二つの説話を語る。）

A 弘法大師が大内裏の扁額を書いた際、奢侈への戒めを込めた。その文字を難じた小野道風が病気にかかったという説話（以下「A 神筆説話」と呼ぶ）

B 『北野天神縁起』を典拠とする道真の生涯と怨  
靈化（以下「B天神説話」と呼ぶ）

〔伝記の終わり〕

（筆者注、以下その後の大内裏再建と焼失が語られ、多額の出費を伴う後醍醐の大内裏再建が批判される）大内裏造営の計画が語られた後、大内裏の殿舎や調度の説明があり、さらにそこから『北野天神縁起』に由来する説話へと続いていくことになる。読者の便宜のためであろうが、説話の概略とその意味の注記については、引用説話に対する訳者マツカラ氏の次のような認識が反映していよう<sup>(6)</sup>。

いくつかの詩的な一節を除けば、軍記物語はシンプルで直接的な言葉で書かれている。その最良のものは、たぶんアイスランドのサーガに匹敵し、最悪のものは平板で陳腐である。もし名を挙げるための努力がなされるなら、軍記物語はなじみのある和漢の古典文学や歴史的事件を、類例や暗示としていくぶん単調に用いがちであるが、そのうちのいくつかは長い余談へと展開してしまう。

この記述では、説話引用自体が退屈で、長文のものにいたっては余談とみなされている。かなり否定的な評価が下されているわけである。これを踏まえて右の説話と前

後の注記を読むならば、この説話引用は、大内裏炎上の先例を示すという本来の役割からはみ出して道真の伝記を語ったものであるとの認識が窺えよう。確かに、『太平記』の説話の中には、卷三十七の長恨歌説話のように、「別の主題を顕在化させた結果、本筋との連関に緊密さを欠く」<sup>(7)</sup>ものも見受けられる。英訳『太平記』が右のような理解を示し、長文説話にわざわざ注記を付したのも、謂れのないことではなからう。

ところが最近、この説話に関して森田貴之氏が注目すべき論考を発表した。すなわち、この説話には典拠の存在も介在する複雑な説話同士のつながりが認められるというのである<sup>(8)</sup>。次章では森田氏の論考に拠り、その具体的な様相を確認していくことにしたい。以下、『太平記』の引用は英訳が主として依拠した『新釈日本文学叢書』を用いることとする。

## 二 『太平記』引用説話の文脈

まずは、英訳の引用では省略した、卷十二「大内裏造営の事附聖廟の御事」のA神筆説話を挙げる。

（筆者注、大内裏の殿舎や調度品を列挙した後）いみじく造並べられたりし大内裏、天災を消すに便な

く、回祿度々に及んで今は昔の礎のみ残り。回祿の由を尋ぬるに、彼唐堯虞舜の君は、志那四百州の主として、其徳天地に応ぜしか共、茆茨不剪、柴椽不削とこそ申し伝へたれ。矧や粟散国の主として、此大内を造られたる事、其徳相応ずべからず。後王若し無徳にして、居安からしめんと欲し給はず、国の財力も之に依つて尽くべしと、高野大師之を鑒み、門々の額を書かせ給ひけるに、大極殿の大の字の、中を引切つて火と云ふ字に成し、朱雀門の朱を米と云ふ字にぞ遊しける。小野道風之を見て、大極殿は火極殿、朱雀門は米雀門とぞ難じたりける。大権の聖者未来を鑒みて書き給へる事を、凡俗として難じ申たりける罰にや、其後より、道風筆を執れば、手戦ひて文字正しからざれども、草書に妙を得たる人なれば、戦うて書けるも、聽て筆勢にぞ成りにける。遂に大極殿より火出て、諸司八省悉く焼けにけり。程なく又造営有りしを、北野天神の御眷属火雷気毒神、清涼殿の坤の柱に落掛り給ひし時焼けけるとぞ承る。(以下略。B天神説話に続く)

大内裏はそもそも本朝に不相応であり、空海は門の扁額を書く際に戒めを込めた。小野道風がこの字を難じたところ中風に罹ってしまったという。その後大極殿から出

火、再建されものの北野天神の眷属によって火災に遭つたことを語り、B天神説話へと続く。

実はこのA神筆説話の流れは、左に概要を示す通り、他の類話とは異なる特徴的なものである。

・A神筆説話の類話

① 『大師御行状集記』(寛治三年(一〇八九))

・空海が筆を投げ応天門の扁額を完成させた。

② 『弘法大師御伝』(文暦元年(一一三三))

・空海筆の皇嘉門の文字に精霊が宿る。

③ 十卷本『高野大師行状図画』(元応元年(一一三九))

九)以前)

・藤原行成が門を修造した際、大師の冥覧を畏れた。

④ 『本朝神仙伝』(平安後期)

・空海筆の朱雀門の文字を難じた小野道風が夢で空海の使いに首を踏まれる。

⑤ 『古今著聞集』(建長六年(一一五四))

・小野道風が空海筆の美福門・朱雀門の文字を難じると、中風になり手が震えた。

※大内裏焼失に関する記述はなし。

⑥ 『源平盛衰記』(十四世紀前半頃か)

・小野道風が空海筆の大極殿の文字を「火極殿」

と難じ、その将来を不安視。実際に安元の大火が起こる。

※北野天神による火災とは関係なし。

①『大師御行状集記』から③十巻本『高野大師行状図画』までは、小野道風は出てこない。④『本朝神仙伝』には道風が空海の字を非難したとあり、⑤『古今著聞集』では、道風が登場して空海の文字を難じて中風になったところまでは『太平記』と共通するものの、いずれも大内裏焼失との関連が示されない。最後の⑥『源平盛衰記』は『太平記』にいちばん近いものの、北野天神とは関連付けて語られていない。類話と比較すると、『太平記』のA神筆説話は特徴的であることが浮き彫りとなる。しかもA神筆説話は、後続するB天神説話の典拠『北野天神縁起』(9)を視野に入れることで、その説話引用の文脈が浮き彫りとなるのである。手がかりとなるのは以下の箇所である。

円融院の御宇の比をい、貞元々年より天元五年にいたるまで七年の間に、三度まで内裏焼亡ありけり。(中略)一条院御宇に、正二位従一位左大臣の官位をば送り奉り給。かの位記の詔書に、勅使菅原幹正、正暦余念八月十九日に太宰府に下付、廿日安楽寺に参りて、御位記の箱を案上に指置き、再拝してよみ

給しに、ひとつの絶句の詩の化現し侍りしに、第一の不思議とおぼへておそろし。

忽驚朝使排荆棘 官品高加拜感成

雖悦仁恩覃邃窟 但羞存没左遷名

件正文は外記のつぼねに納られて、けふまで侍るなり。道風が筆跡に少もかはらざりけり。誠に弘法大師の、「菅丞相我違世の身なり。小野道風はわが順世の身なり」と示し給たるも、是にてぞ実事とは覺ゆる。

円融院の御宇に三度内裏が焼失したという。これを受けて一条院の時代に道真に官位が送られた。安楽寺で位記を読んだところ、一首の詩が化現した。その筆跡は小野道風と同じであり、空海が道真は自身の「違世の身」、道風は「順世の身」であると述べたことに符合していたという。

このように、B天神説話の典拠である『北野天神縁起』では、内裏焼失に関わる箇所では空海・小野道風・菅原道真という興味深い連関が示されている。『太平記』ではこうした連関を踏まえた上で、A神筆説話に導かれるかたちでB天神説話が語られていると考えられる。

さらに、ここでB天神説話の末尾に目を転じてみると、A神筆説話と同様の文脈が構成されていることが分か



る。

是を以て上一人より下万民に至るまで、渴仰の首を傾けずと云ふ人はなし。誠に奇特無双の靈社也。去程に、治暦四年八月十四日、内裏造営の事始有つて、後三条院の御宇延久四年四月十五日遷幸あり。(中略) 目出かりしに、幾程もなく、又安元二年に、日吉山王の御崇に依つて、大内の諸寮一字も残らず焼けにし後は、国の力衰へて、代々の聖主も、今に至るまで造営の沙汰も無かりつるに、いま兵革の後、世未だ安からず。国弊へ民苦みて馬を華山の陽に帰さず。牛を桃林の野に放たず、大内裏作らるべしとて、昔より今に至るまで、我朝に未だ用ひざる紙錢を作り、諸国の地頭、御家人の所領に、課役を懸けるるゝ条、神慮にも違ひ、驕誇の端とも成りぬと、眉を顰むる智臣も多かりけり。

傍線部ではいわゆる安元の大火から大内裏が廃絶したことを語り、二重傍線部では後醍醐の大内裏造営を批判している。A 神筆説話と同様、B 天神説話においても大内裏焼失と大内裏造営批判に繰り返し言及しているわけである。

以上を踏まえ、森田氏は『太平記』当該説話の背景について次のように論じている。

再び内裏造営批判の文脈を確認して幕を閉じる。この文脈(筆者注、大内裏造営が批判されること)は『太平記』の中へ、北野天神縁起を導く役割を担っていたA 神筆説話と同じであり、『太平記』の北野天神縁起の冒頭を<sup>(マヤ)</sup>末尾は、共に造営批判で整合的である。作者は、弘法大師や小野道風と菅原道真との説話的つながりを自覚した上で、北野天神縁起の前にA 神筆説話を配し、弘法大師説話と北野天神縁起という二つの説話の連関によって造営批判の文脈を構成していったのではないか。

このように、A 神筆説話とB 天神説話の典拠を視野に収めた詳細な分析によって、単なる先例の提示にとどまらない『太平記』の複雑な説話引用の様相が明らかになったわけである。さらに次章では、筆者がわずかに付け加えることとして、卷三十五のいわゆる「北野通夜物語」を取り上げ、新たな典拠の指摘によって説話引用の文脈が見えてくると思われる事例を報告したい。

### 三 典拠の解明から見える説話引用の文脈

卷三十五「北野通夜物語」は、ある秋の半ば過ぎに北野社に三人の人物(遁世者・雲客・法師)が集い、長期

化する戦乱の原因について談論する章段である。問題の説話は、遁世者が語る箇所で引用されている。

昔は民苦を問ふ使とて、勅使を国々へ下されて、民の苦を問ひ給ふ。其故は、(A) 君は民を以て体と爲し、民は食を以て命と爲す、夫穀尽きぬれば民窮し、民窮しぬれば年貢を備ふる事なし。(B) 疲馬の鞭を恐れざるが如く、王化をも恐れず、利潤を先として、常に非法を行ふ。民の誤る処は吏の科也。吏の不善は、国王に帰す。君良臣を選まず、利を貪る輩を用ふれば、暴悪を恣にして、百姓を虐ぐれば、民の憂天に昇て災変をなす。災変起れば国土乱る。是上慎まず下侮る故也。国土若し乱れば、君何ぞ安からん。百姓荼毒して、四海逆浪をなす。されば(C) 湯武は火に身を投げ、桃林の社に祭り、(D) 太宗は蝗を呑んで、命を園囿の間に任す。己を責て天意に叶ひ、民を撫でて地声を顧み給へと也。則ち知んぬ(E) 王者憂樂は衆と同じかりけりと云ふ事を、白樂天も書置侍りき。

遁世者はかつて「民苦を問ふ使」(問民苦使)が諸国に派遣されていたと語る。説話というよりも漢籍由来の表現を駆使した政道論といった趣を呈している。そのためか、先行研究ではAからEの表現の典拠が既に近世の注

釈から指摘されてきた<sup>(10)</sup>。すなわち、Aは『礼記』「緇衣」、Bは『塩鉄論』詔聖、Cは『呂氏春秋』九「順民」、Dは『貞觀政要』八「論務農第三十」、Eは『白氏文集』一「諷諭一」に依拠している。しかし、実はこの箇所は全体にわたる一つの典拠が存在する。それは、十三世紀半ばに成立した弘法大師絵伝の一つ『高野大師行状図画』<sup>(11)</sup>である。諸本中最も多く現存するといふ<sup>(12)</sup>十卷本(元応元年(一一三九)以前)に拠り、讃岐国を訪れた問民苦使が幼い空海を見出すという箇所を次に挙げる。

昔問民苦使とておほやけより御使を国々へ下されて、民の苦をとほせ給けり。其故は、君は民をもて体とす。民は食をもて天とす。穀つきぬれば、民窮しぬ。民窮ぬれば、礼備る事なし。疲馬のむちをおそれざるが如く、王化をもおそれず。利潤をさきとして非法を行ず。民のあやまつところは吏のとが也。吏の不善をば国主に帰す。又君良吏をゑらばずして、貪佞のともがらを用れば、暴虎をほしきまゝにして、百姓をしえたぐ。民のうれへ天にのぼりて災変をなす。災変おこれば国土みだる。これ上のつゝしまざるよりおこり、下のおごれるよりなる。国土若みだれなば、君なにをもてかやすからむ。百姓荼毒して

四海逆浪をなす。されば陽武火にながせて身を桃林の社にまつり、太宗蝗をのみて命を<sup>(ミコ)</sup>国<sup>(ミヤ)</sup>圍のあひだにまかす。おのれをせめて天意にかなへ民をなで、地聖をかえりみ<sup>繪</sup>。則しりぬ、王者之心憂樂衆生とをなじかりけりと云事をとこそ、樂天もかきをき侍れ。

網掛け部分のような相違点はあるものの、『高野大師行状図画』と『太平記』がほぼ同文関係にあることは一目瞭然であろう。これまでの研究では、当該箇所表現に関する典拠は指摘されていたが、実はこの箇所全体にわたる依拠資料が存在していたのである。しかも、この典拠の存在からは、問民苦使説話とその次に語られる説話との深い連関までが窺えるのである。問民苦使説話の後には、次のような説話が続く。

：：：されば延喜帝は寒夜に御衣を脱がれ、民の苦を愍み給ひしだに、正しく地獄に落ち給ひけるを、笙岩屋の日藏上人は見給ひけるとこそ承れ。彼上人承平四年八月一日午時頓死して、十三日ぞ御座しける。其程夢にも非ず、幻にも非ず、金剛蔵王の善巧方便にて、三界流転の間、六道四生の栖を見給ひけるに、等活地獄の別処、鉄嶮地獄とてあり。(中略) 其中に焼炭の如くなる罪人四人在り。叫喚する声を

聞けば、忝くも延喜帝にてぞ御座しける。(中略) 上人畏つて唯涙に咽び給ふ。帝の宣はく、汝我を敬ふ事勿れ。冥途には罪業無きを以て主とす。然れば貴賤上下を論ずることなし。我は五種の罪に依つて、此地獄に墮ちたり。一には父寛平法皇の御身命を背き奉り、久しく庭上に見下し奉りし咎、二には讒言に依つて、咎なき才人を流罪したりし報、三には自らの御敵と号して、他の衆生を損害せし咎、四には月中の齋日に、本尊を開かざる咎、五には日本の王法を甚じき事に思ひて、人間に著心の深かりし咎、此五を根本と為して、自余の罪業無量也。故に苦を受くる事無尽也

醍醐天皇は寒夜に御衣を脱いで民の苦しみを思いやつた。しかし、それでもなお地獄に堕ちてしまったことを日藏上人は目の当たりにしたという。この醍醐天皇墮地獄説話は、安楽寺本『北野天神縁起』に拠っていることが先学により明らかにされており<sup>(13)</sup>、問民苦使説話とそれに続く醍醐天皇墮地獄説話は、それぞれ『高野大師行状図画』と『北野天神縁起』を典拠とする説話が連続して語られているということになる。典拠に注目してみたとき、先に見た巻十二の例と同様、ここでも空海・北野天神という連関によって二つの説話が結びつけられ

ていることに気付く。そして「北野通夜物語」では、その連関によって政道論が展開されていくという文脈が構成されているわけである<sup>(14)</sup>。

このように、『高野大師行状図画』という新たな典拠の存在を視野に入れることによって、問民苦使記事と醍醐天皇墮地獄譚との説話的つながりと文脈とが浮かび上がってくる。これは、『太平記』が説話を引用する際に用いた複雑な手法を示す事例として注目されるであろう。

### おわりに

『太平記』における長文の説話引用は、一見すると南北朝動乱の歴史を語る上での夾雑物のようにも思われる。英訳『太平記』の注記は、序文や脚注などと同様、英語圏の読者を『太平記』の世界に誘うための効果的な工夫であると同時に、右のような長文説話に対する理解を反映しているよう。

本稿では、『太平記』研究の進展によって、そうした長文説話に対する理解が見直されつつある状況について報告した。加えて、『太平記』の引用説話については、海外とりわけ中国の研究者による最近の成果も注目され

る。例えば、卷三十八「大元軍事」では、宋と元の合戦に関する長文の説話が語られる。張静宇氏が指摘するように、この説話からは、中国宋元代の流行や巷間で語られた講談といった文化を摂取した形跡が認められるのである<sup>(15)</sup>。

そもそも現存『太平記』の成立には、大陸の最新の文化を摂取し得た五山禅僧が関与していると考えられる<sup>(16)</sup>。そのため、『太平記』に夥しく引用されている説話を読み解くには、右のような研究の国際的な広がりが必要となる場合がある。本稿で述べたような、個々の説話の意図や文脈を読みほぐしていく作業と同時に、海外の研究者との協力による広範な典拠調査の余地が残されていよう。

一方、西洋では一九九〇年代以降、研究者の間で南北朝時代に対する注目が集まりつつあるという<sup>(17)</sup>。西洋の哲学・文学理論を援用した『太平記』の作品論が試みられ<sup>(18)</sup>、『太平記』を世界文学の一つとして捉えるべきとの提言がなされるに至っている<sup>(19)</sup>。とはいえ、マツカラ氏以降『太平記』の英訳が公刊されることはなく、『太平記』の専論もほぼないという状況は変わらない。本稿で紹介した引用説話の研究動向は、南北朝時代を知るための必須文献ともいえるべき『太平記』の読

み方に再検討を迫るものといえ、西洋で関心が高まっているという南北朝時代の研究にも資するところがあるう。

以上よりすれば、説話引用の典拠と文脈に着眼した考察は、国際的な性格を帯びつつある『太平記』研究を今後推し進めていく上で、有益な着眼点となり得るものといえよう。

〈注〉

(1) 『太平記』原文の引用は、英訳『太平記』が依拠した物集高量校注『新釈日本文学叢書』（日本文学叢書刊行会、一九三〇年）に拠る。

(2) 松尾葦江『軍記物語論究』（若草書房、一九九六年〈初出は一九九四年〉）一二七頁。

(3) Helen Craig McCullough "Taiheiki: A Chronicle of Medieval Japan". Columbia University Press, 1959

本稿ではタトルクラシックス版（二〇〇八年）を用いた。以下、英文資料の引用は私に訳した。

(4) 市古貞次「マッカーロ氏の英訳太平記」（『国語と国文学』第三十七巻第四号、一九六〇年）一四七頁。

(5) Jeremy A. SATHER "The myth of peace: "Taiheiki" and the rhetoric of war". ProQuest Dissertations Publishing, 2012, p9

(6) 英訳『太平記』「序論」十五〜十六頁。

(7) 北村昌幸『太平記世界の形象』（塙書房、二〇一〇年〈初出は二〇〇五年〉）一八七頁。

(8) 森田貴之『『太平記』と弘法大師説話』（『太平記』国際研究集会編『『太平記』をとらえる』第二巻、笠間書院、二〇一五年）三十六頁〜七十一頁。

(9) 引用は、『日本思想大系』に拠る。

(10) 近世の『参考太平記』に既に指摘があり、これを日本古典文学大系、新潮日本古典集成といった現代の注釈書も踏襲している。

(11) 引用は、『弘法大師伝全集』所収十巻本に拠る。

(12) 黒田智「弘法大師絵の中世」（人間文化研究機構国文学研究資料館編『絵が物語る日本 ニューヨークスペンサー・コレクションを訪ねて』三弥井書店、二〇一四年）五十五頁。

(13) 後藤丹治『太平記の研究』（大学堂書店、一九三八年）一五六頁。

(14) ただし、問民苦使説話の有無については、次に示すように諸本による異同がある。

・主要諸本における両説話の有無

	『太平記』諸本	問民苦使	醍醐天皇墮落地獄
神田本		説話	説話
玄玖本	○	○	○
神宮徴古館本	○	○	○
西源院本	○	○	○
梁田本	×	×	×
内閣文庫本	○	○	○
米沢本	○	○	○
梵舜本	×	×	×
天正本	×	×	×
義輝本(教運本)	×	×	×
京大本	×	×	×
日置本	○	○	○

基本的に問民苦使説話・醍醐天皇墮落地説話ともに有するものと、いずれも有さない諸本とに大別できる。その後関係は分からないものの、問民苦使説話を有する諸本がほぼ両説話をセットで語る点は、本稿の推測の傍証となるかもしれない。精査を要する。

(15) 張静宇「『太平記』卷三十八「大元軍事」と宋元文化」(『太平記』研究国際集會編『『太平記』をとらえ

る』第二卷、笠間書院、二〇一五年) 十二頁〜三十五頁。  
 (16) 森田貴之「『太平記』と元詩―成立環境の一隅―」(『国語国文』第七十六卷第二号、二〇〇七年二月) 十七頁。

(17) ジェレミー・セーザ「南北朝時代の重要性と世界文学としての『太平記』」(『太平記』研究国際集會編『『太平記』をとらえる』第三卷、笠間書院、二〇一六年) 七十一頁〜七十六頁。

(18) ジェレミー・セーザ「下剋上への道―『太平記』に見る觀応擾乱と足利権力の神話」(『太平記』研究国際集會編『『太平記』をとらえる』第一卷、笠間書院、二〇一四年) 一〇〇頁〜一一七頁。

(19) 注(17)に同じ。

※本稿は JSPS 科研費(若手研究(B) 課題番号 17K13388) による研究成果の一部である。

---

「研究科プロジェクト」成果報告書  
『日本文学を世界文学として読む』

平成三十一年（二〇一九）三月三十一日発行

編集 山本 真由子

発行 大阪市立大学大学院文学研究科  
都市文化研究センター

〒五五八―八五八五

大阪市住吉区杉本三―三―一三八

電話〇六―六六〇五―三一―一四

印刷 博進印刷株式会社

〒五五九―〇〇〇二

大阪市住之江区浜口東二―七―二四

---